

私にも 言わせて! 第100回

行政医であり臨床医であり 「二刀流でいっしょ」



山形市保健所
(山形市健康医療部)
副所長(保健医療次監)
加藤 裕一

山形県鶴岡市出身。1996年山形大学医学部医学科卒業、2002年山形大学大学院医学系研究科修了。山形大学医学部附属病院にて血液内科医として診療・研究・教育に従事。2013年4月より輸血・細胞治療部講師、副部長。2017年4月より病院教授、2019年1月より山形市市民生活部保健医療次監、同年4月より現職。日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会専門医、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医、日本輸血・細胞治療学会輸血認定医・細胞治療認定管理者・I&A視察員、日本造血移植学会移植認定医、社会医学系専攻医。

初めまして。記念すべき第100回に執筆することになりました山形市保健所の加藤裕一です。23年の間、血液内科医として臨床畑を歩いてきました。2019年4月に山形市の中核市移行に伴い、新たに保健所が設置されるに当たり、縁あって同年1月に異動してまいりました。行政医の知識・経験はまだですが、日々臨床医の視点を生かすことができないか、模索しながら業務を行っています。

これまでの歩みと転機

今でこそ制度として卒業研修プログラムが当たり前となつていますが、私が大学院を修了した当時は入局が当たり前の時代で、入局することから医師としてのキャリアが始まるのが一般的な時代でした。私が入局した山形大学医学部内科学第三講座は、内分泌・代謝・糖尿病学、神経内科学、そして血液内科学を扱う講座でした。入局当初から主担当医を任せられ、同時に3分野の患者を各一人ずつ担当するという、今では考えられない

システムでした。忘れられないのは入局1か月目で担当した再発急性骨髄性白血病の同種骨髄移植の患者さんで、その後に血液内科を専攻するきっかけとなった方でした。

大学院を修了し、血液内科医として講座内でも指導する立場になったところに転機が訪れました。自身が指定難病の一つに罹患したことです。種々の症状から、うすうす感じていましたが、いざ診断を突き付けられた時はショックでした。一方で、告知を受ける側の気持ちを体験することにもなりま

保健所開設から現在

お声掛けをいただいたものの、これまで保健医療行政への関わりは、山形県社会福祉審議会臨時委員(免疫不全担当)や山形県合同輸血療法委員会委員としての接点のみで、いったい何を行ったらよいのか不安がありました。一方で開設準備段階から関わることができ、臨床医の視点を山形市の

療先進都市」を推進するためのプロジェクトチームのサブリーダーも担当しています。このチームは所長が提案した「スクスク(SUK・SK、S・食事、U・運動、K・休養、S・社会、K・禁煙・受動喫煙防止)生活のすすめ」に基づき、市民の健康保持・増進に関する事業を総合的に行い、新たな知見に基づく政策を積極的に立案するためのチームで、データの収集・調査結果・分析を行うためのシンクタンク機能を有しており、シンクタンクのメンバーは「部内横断的」に構成されるという特徴です。これは全国的にも珍しいと思えます。シンクタンクからは認知症に関連する歯周病、減塩、腹部肥満についての山形市独自のエビデンスが少しずつ得られています。

保健所として 地力を付けるために

「部内横断的」という言葉を使いましたが、これを行政で行うことにハードルの高さを感じています。「多職種連携」が当たり前であった臨床医の視点から見ると、「一つの部門が相当追い込まれない限り他

部門からの応援体制が始動しないこと」に驚きを隠せません。「困ったときはお互いさま」という感覚はあるのですが、残念ながら「専門外」ということで「積極的」に関わってくださることはありません。健康危機管理において部内連携は極めて重要です。コロナ禍の今だからこそ「部内連携の構築」は喫緊の課題と考えています。

また所属する専門職たちは極めて優秀です。しかし皆、行政職も兼ねています。それ故に「行政職としての業務」に時間を取られ、「専門職本来の力」を発揮できていないように感じます。行政職としての仕事ももちろん重要ですが、「専門職本来の力を発揮できる環境づくりの推進」も重要な課題と考えています。一筋縄ではいかないと思いますが、これらが実現できるころには、きっと「保健所の地力」は上がっているものと思えます。

国立保健医療科学院での 出会い

話は変わりますが、2020年度の研修は初の全日程遠隔研修で

「二刀流でいっしょ」

した。現場の空気感を味わえなかったのは残念でしたが、国立保健医療科学院スタッフのご尽力もあり、また同期にも恵まれたこともあり、非常に充実した研修となりました。新型コロナウイルス感染症のよろもろの対応ではLINEを通じて皆さまの貴重な経験を参考にさせていただきます。

大病院(内科学第三講座)、山形市のご厚意もあり大病院で血液内科の診療を行っております。現在はコロナ禍で中断しておりますが、週一回臨床現場に身を置くことが、行政医師としての自分に新たなインスピレーションを与えてくれます。一方、「行政の知識・経験不足の解消」が課題です。課題を解消し行政医としての密度を上げるために、国立保健医療科学院の保健福祉行政管理分野分割後期を受講することにしました。職場の理解と後押ししてくれた所長に感謝です。今後行政医と臨床医の「二刀流」でいけるところまでいきたいと思っています。

保健医療行政に生かすことができるかもしれないという期待もありました。9か月ほど悩んだ末に新たな分野に挑戦するつもりで、2019年1月1日に異動しました。

異動当初から主な業務は感染症領域で、保健所開設準備期間には新型インフルエンザ感染症等の流行に備えて、シミュレーションシナリオの作成、ロールプレイの実施を担当しました。いざ山形市保健所が開設されふたを開けてみると、最初に届け出があった指定感染症は「つつが虫病」と山形ならではのものでした。ご多分に漏れず山形市も新型コロナウイルス感染症の対応一色で、クラスターも発生しています。水面下では結核やレジオネラ症などが静かに発生しており、臨床現場と同じような緊張感が漂っています。一方、山形市が掲げる「健康医

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」は、
全国保健所長会ホームページに
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会 月刊公衆衛生情報 http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushusei_watashi.html